

れらはそれぞれ異なつた意味をもっているのであるが現実にはどのような関係があるかを市販の知能テストと性格テストについて検証してみた。測定法は再テスト法、K-R法、折半法である。結果はそれぞれ意味が異なるにもかかわらず或程度まで対応のあることがわかり、また平均すればいずれの係数もほぼ等しくあらわれた。K-R法と折半法とが相関のあることは当然であるが、K-R法と再テスト法の相関が、折半法と再テスト法の相関より高いことが示唆された。これも予想される事である。

### 精神薄弱児をもつ親の態度

東京大学 三木 安正

子供の能力に対する親の評価は、子供の行動に対する期待のよつて立つところとなり、それが子供の扱い方、子供に対する態度を規定するものとなる。

そして、精薄児の教育・指導においては、特にそれが重要な意味をもつので、本研究は(1)精薄児をもつ親はその子供の能力をどう評価しているか。

(2) その評価と親の「精薄」についての理解あるいは知識・親の教養などの関係。

(3) 親の評価における過大・過小評価が子供の社会的適応にどう関係するか、等を問題とした。調査は各地の特殊学級54学級・精薄施設8施設に依頼した。

親の60%以上は子供の能力を過大評価しており、有意な差はなかつたが、過大評価されている子供は適応状態が悪いように見られる。将来方法を再吟味して上記の問題を明らかにして行きたい。

### 生活環境と精薄児の社会的生活能力について

東京大学 伊藤 隆二

目的：従来、悪い生活環境にある精薄児（下町精薄）は、良い生活環境にあるもの（山の手精薄）より社会的生活能力が高いといわれているが、このように生活環境の差異が精薄児の社会的生活能力にどう影響するかをみる。

方法：鈴木ビネ知能検査・社会的生活能力検査・生活環境調査票（家族構成・出生地・生育地・職業・生活程度・教育程度・教育態度・家庭の雰囲気など調査）。（V Pは男子51名女子32名）

結果：生活環境調査から、生活環境を優から劣へ、A・B・C・D。（A・Bは普通より優、C・Dは劣）に類型し、これを(1)SQとIQの差で比較した結果、男女とも $D > C > A > B$ で、DとBとの間で有意差( $P < 0.05$ )が認められた。(2)社会的生活能力各項目中、作業能力(O)、意志交換能力(C)とで、いずれも $D \cdot C > A \cdot B$ で有意差( $P < 0.01$ )が認められ、又(3)、生活環境の類型にかかわらず、集団参加能力(SO)が男子が女子より有意に( $p < 0.01$ )すぐれていた。

### 外・内因性精薄児の知覚行動の相違

——ロールシャッハ・テクニクによる——

京都大学 藤本文朗

精薄児は、生活年令の増加するにしたがつて、知能遅滞+性格異常になる場合が多い。その意味で、精薄児の

臨床診断として単に知能テストのみならず、パーソナリティテストが必要である。本研究は、ロールシャッハテストを取上げ、従来いわれて来た、(Werner & Strauss) 外・内因性精薄児の性格の相違について追試し、更にSloanのロールシャッハ精薄ノルムを検討し、同時に精薄児のスルト施行法、分類法の問題点を考察した。被験者は両群各25名、モロン級特殊学級中学部男子である。結果として、この年令の精薄児では、両群の性格の相違はロールシャッハテストによつては見られなかつた。又Sloanのノルムはかなり妥当性があると思う。更にテスト分類法は精薄児の場合、一般分類では十分な診断資料とならず、Friedmanの分類法がかなり適していると思われる。今後我々は、精薄のロールシャッハテストによる臨床診断基準のための資料を蓄積していきたい。

### 精神薄弱児のコミュニケーション

東京教育大学 中野善達・堅田明義

青島養護学校 林 邦雄・井田範美

#### (1) 問題へのアプローチ 中野 善達

精神薄弱児のコミュニケーションの特質に関しては問題の重要さにも拘わらず研究がほとんどなされてはいない。我々は教師が児童に、また教師が児童を媒介として家庭に、更には児童同士が相互にコミュニケーションしあう時、精神薄弱児が情報伝達の担い手として、如何なる情報をどの程度正しく伝達しうるかを問題とし研究を進めている。

本報告はその一部であつて、一定範囲の知的水準を有する精神薄弱児(CA12~13, MA 8~9, 平均IQ66)に伝達情報を連鎖的に再生させ、その伝達の度合と変容の過程について考察したものである。

伝達文は小学国語(1~4年)教科書から40文例(文節数3~16のもの)をとり、発語明瞭度、聴力を検査した被験者に口頭で再生をさせ、テープコードと筆記を併用し記録を行なつた。尚、CAをmatchさせた群、MAをmatchさせた群、2群の正常児にも同様の手続きをなした。

### 精神薄弱児のコミュニケーション

#### (2) 情報伝達の変容過程 堅田 明義

かかる実験の結果、以下の諸点がわかつた。精神薄弱児の情報伝達において、短い文ほど比較的忠実に伝達される傾向がみられ、文節数からいえば3文節程度の文が望ましい。しかし、文長のみでは規定し難く、伝達内容が伝達の難易(具象性の文>抽象性の文)に関係がある。正常児群との比較の場合、MAが同じでもCAが同じでも精神薄弱児群の方が著しく伝達率

$$\left( = \frac{\text{各被験者の正しく伝達した文節数の総和}}{\text{全文例の文節数の総和}} \times 100 \right)$$

が低いことが明らかになつたが両群共漸減の傾向は同じであつた。又、伝達文内の文節の位置効果はある文節数の範囲内では認められた。更に正常児は伝達文を機能的にまとまつた形(文の意味・内容を考えて)で伝達される傾向がみられたが、精神薄弱児では支離滅裂で文をなさなかつた。両群共脱落は多いが変容は少なかつた。正常児では慣用的語法への同化が多く、精神薄弱児では自己関心への同化、聞き違い、時制の過去形化が多かつた。